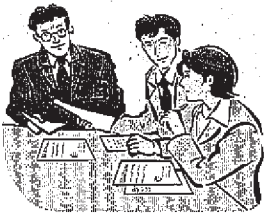



里見吉英

区分は非該当から区分6までに分かれ、非該当とは福祉サービスを殆ど受けられない、つまり支援の度合いが低いという事になります。支援度がある

毎に区分が高くなります
が、区分が高くて良か
ったと思うか、悪かつた
と思うかは見解が違つて
きます。区分6では殆ど
のサビスが受けられ
支給率も多く出ている
下は、並一區面高、



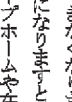
言すが、近頃は地位が落ち
なつて来ます。利用者は一割
負担がありますので、高く判定を出さない
で欲しいという方もいるようですが、そう
なりませんと受けられないサービスも出てく

ると同時に報酬単価の關係でサービス提供事業者も困ってしまうという事態も想像されます。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

定です。市町村によつては、利用している
総わり、これから入居率の方たちに移す予
施設が新しい体系に移る時に区分判定を実
植しますと言ふ所もあつたですが、なる
べく早く判定を受けていたかと思ひ
ます。何故ならば五年間の経過措置はあり
ますが、五年が経ちますと否心なしに新法
に移行します。どのように移行するかと言
いますと、夜間と昼を分けた事業体系にな
るわけですから、ふる里学舎の場合、市原
や和田浦に入所している方のことを考える

と、夜間支援つまり障害者支援施設と日中活動の生活介護に移るしかありません。そうしますと、障害者支援施設は区分4以上、生活介護は区分が3以上で



ないと利用できなくなりま
す。それ以下になります」と
例えはグループホームや在
宅、アパートに移る事等を
考えなくてははいけません
五年経過してから判定を受
けますと、結果が出るまで
判別できないまま、退院の


期間もなくなつてしまひます。この五年間を有効に使う為には自分の子どもも区分がどこに位置するのが早く分らないと、対策が立てられなくなります。事業所

側もどのような体系に移れば良いのかが見えない為、早めに自分の施設を利用して貰う方の区分を知る必要があります。



とを大きく分けておいて、調査を行っているケースもあります。それによって本来は同じ障害の種類で同じ支援策だと思われる方が、ある地域では区分3になってしまったり、別の地域では区分1になってしまったり、別のバリエーションが出ています。中には審査会の段階で区分2から区分6になつてしまったケースもあるようです。このような区分のバラつきを防止する為にも保護者の方には、調査の段階で本人の状態が分かり易いように答えていただきたいと思ひます。

例えば排便の項目について「トイレはどうですか」との質問に、「自分でいけます」と



とと較する事が難しいようです。


衣類の着脱に關しても同様です。娘が用意して「これを着なさい」と言つて着る方には既に支援が入っています。季節に應じて衣服を替へていくと、暑い寒いになる

その管理は親や施設の職員が行わなければならないません。実は、その管理が大家な事は言うまでもないのですが、しかし、こゝういふような差は区分には反映されません。

また、傾向として、自閉症と言われる方

「――スの診断書には「廃人同様」
と記載されており、確然として
した。」

早く認定調査を受けた方
が、良いという理由のもうひとつは、
不服申立があげられま
す。自分の区分が分かった段
階で、いっしょにうもの子と
区別がなされる。そして、手



早く認定調査を受けた方が
良いという理由のもつひと
つは、不服申立があげられま
す。自分の区分が分かつた段
階で、どうしてうちの子ども
が区分するの。もっとも、市
が区かるのに・・・」というた
ま食、市原
市では、すぐに異議申立を受け
付ける形式をとっています。こ
の方法は市町村によつては異
なりまゝです。市町村によつて
は受け付けない場合というこ
ろもありまゝです。受け付けれ
ば、六十日以内に県に不服申立
をしなければなりませんので、
いろいろな状況から早く判定を
受け対処すべきだと思います。

公証にサービスを受けることができる様に
 始まった法律でしたが、判定の出だしから
 全く上々くいついていない状況です。その義
 一番理解している立場の保護者の方や我々
 が、必要な支援を分かちて貰えるよう対策
 を立てる必要があります。

めてバイキングを行いました。どうなるのかと最初は心配していましたが、大きな問題もなく、利用者の方は大変喜んでいました。このような状態で判定されてしまいました。すべて、皆さん区分1若しくは区分2になつてしまします。施設で生活していると、本人も自分の行動のサイクルが理解できていますから手がかからなくなっています。極端

ることになりました。その介抱費も被験者になりませんでした。そして、もう一つ重要な状況です。そこに障害者も参入することになれば、保険料を倍近く支払わなくてはならないでしょう。税金で乗り切るのが方法はないと思いますが、それもまた難しい状況です。

先日にもNHKで放送されていましたが、介護をする職員の待遇が悪いため離職者が多く、平均勤続年数は三十三と云われてしま

ることに決めた。伊藤院長は自分とてまた、
くではならぬでしよう。税金で乗り切
ては方法はないと思いますが、それもまた
難しい状況です。

先日NHKで放送されていましたが、
介護をする職員への待遇が悪いため離職者が
多く、平均勤務年数は三年と言われていま
す。これは介護保険の報酬単価が減額して
事も影響しています。大規模なところはそ
れ程ではなかったようですが、小規模の旗
船は影響を大きく受けた。今後、障害
福祉も同様になると思います。最近施設
長の研修会でも、処遇の話は全くなく殆ど
がお金の話になり、福祉が福祉ではなくな
ってきています。

たのは、今から二〇年程前です。その頃私は県の事業団で働いていました。入所施設が不足しており、入所できない保護者の方たちが、毎日のように入所させて欲しいと相殿に来ていましたが、事業団も定員がいっぱいでした。そのような状況ならば、地元に施設を作ってみようと思ひ、私の家族とひる里学舎を立ち上げようと思ひ

親戚を説得し、苦勞の連続のなかで七年の準備期間を経てようやく開設することができました。その後、親御さんの要請に心を通ずる形で通所部「児童デイサービス」を重症心身障害児者通園事業B型、和田浦と整備していかれたらに。いつの間にか利用定員が四〇〇名になり、その他八〇〇名近くの在宅サービスを利用される皆さんと関わりを

困でこのように手を差し伸べたら良いのか
 それを考え実行する事が我々プロとしての
 仕事だと思つています。

五〇年間もの間、動かなかつた擅置制度
 の時代が、この三年しか経たないうちに大
 きく変わりました。そして、この六、五年
 間の経過措置の間に福祉が安定するかと言
 へば私はそうは思いません。少なくとも後
 半はなかなからずしょう。こんな時代だから

五〇年間もの間、動かなかった措置制度の時代が、この三年しか経たないうちに大きく変わりました。そして、この矢、五年間の経過措置の間に福祉が安定するかと言えど私はそうは思いません。少なくとも多少十年はかかるでしょう。こんな時代だからこそ、福祉とは何かというところの原点に返る事が大事ではないかと思えます。保護者の方たちと我々福祉の職員が手を取り合い、守っていかねければならないものがあるはずです。

(理事長)

平成十八年十月二十日

とろろ塾生 倉家 展会 ― 泊研修会にて ―



ふる里学生会家族会—泊研修会にて—

平成十八年一月二十日

理事長

研修旅行で想うこと

有馬 恒夫

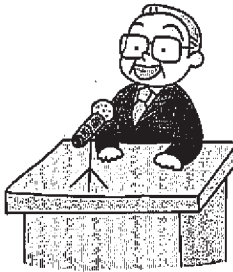
穏やかな秋の空気である。春の家族一泊旅行とは違って親同士のややのんびりとした雰囲気。研修旅行である。出発地のしぜん工房前のマイクロバス四台、受付けの際、二寮のペランダから息子のこちらを見つめる強い視線を感じ、見つかつて騒がれないように隠れるようにして乗り込んだ。息子たちの行く末を考え合う「自立支援法」とある「里学舎」の勉強会の旅でもあり、息子には「一緒に旅行は行けないが、お互いのためだから落ち着いて待つてくれよ」と心で囁いた。今年度は家族会の役員の一入としての役割も担い、併せて奉還から福祉制度適用について慌たしい動きもあり、例年とは少し異なつた想いもあつてなぜか肩が重い氣もした。



息子久貴とある里学舎の関わりを振り返ってみると、養護学校時代に交流合宿を利用してから、本人の目的にも、親のためにも交流合宿利用者の切実な想いが伝わってきたとがわかり始めた頃だった。大声を出して周囲を怖がらせたり、道路を突っ走ったり、パニックたり、先行きの見えない頃だった。バス・電車

が大好きだが、乗降時、大声を今でも出し、ホーム・車内を歩き回ったりして大変なことも多かった。学校卒業後、短期入所サービスを利用することで、入所生活へもスムーズに移行できた。

学舎行事の本人が写った写真は、なるほどそれなりに仲間と溶け込んでいるように見える。ただ、共同生活での排便がなかなかうまくいかなかった。周りに心配をかけたつとも、いざ息子に排便を成功させ、「ウン、ウン、オー」と誇らしげに喜んでい



今年六月、東京日比谷公園で、全国的障害者施設・利用者団体による障害程度区分見直しを迫る緊急集会が行われた。家族会役員になつたばかりで、担当の会計事務にも慣れない状況で、短期間で家族会の有志参加者の動員に関わった。猛暑の日、熱気と障害者団体の怒りに満ちた雰囲気を感じ、施設利用者の環境が、極めて厳しくなっていることを肌と感じた。車椅子使用の重い障害の弟を連れてはるばる北海道から飛行機で急遽駆けつけた兄弟もいた。首都圏に住む我々以上に地方の施設利用者の切実な想いが伝わってきた。そして、わが家族会からの参加者の「親も何かしなくては」という予想を越えた強い共感が頼もしく思えた。また、七月には家族会を代表した数名で、千葉県知的障害施設家族会

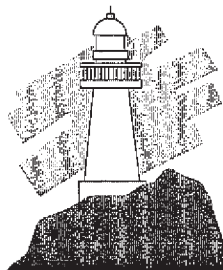
チキンボーイの夢

須藤 岳人

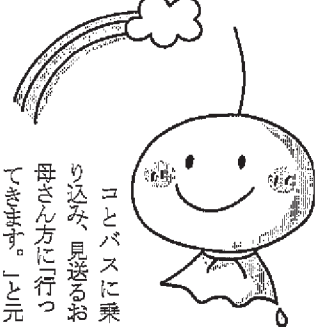
田舎育ちで世間知らずな私の東京勤務デビュー戦。電車を降りるとあちこちに階段が……。オロオロ……ウロウロ……

しどろもどろになりながら、「コイシカワホウメン、チジョウニアガルニハ……。」と駅員さんに尋ねると、笑顔で出口を教えてくれた。「この国の人には優しいなと、まるで外国気分。早いもので佑啓会の職員となり八月が過ぎようとしている。振り返ると毎日が刺激的であり、発見の連続で、ただ先輩方の背中を見ながら我武者羅にやっていた始めの頃から、少しずつではあるが視野も広がり自分の役割・スタイルが見えてきている最中であるように思う。何より、自分自身の毎日が楽しく充実している。しかし、そのことが利用者者に直結していなければただの自己満足ということになってしまうが毎朝利用者の笑顔を見るとほんとと安心する。

さて、先日九月十四、十五日と年間屈指のビックイベントの一泊旅行に行ってきた。宿直業務などもしたことの無い私は、利用者と一晩共に過ごすことは人生初の体験である。職員と利用者、お互い九時から十六時の作業所での顔しか知らないわけでもない寝顔をするのだらうなどと、いろいろなきが気になつていく。利用者には負けないくらい楽しみにしていたのかも知れない。出発当日は、目覚めの行いが悪いのか、前日に作ったテルテル坊主のいたずらか、生憎の雨であった。そんなこと興やゲームなどで大いに盛り上がり



(有馬 久貴文)



コとバスに乗り込み、見送るお母さん方に「行ってきます。」と元気よく手を振る。さあ、千葉に向けて出発！館山に着きバスを降りると雨も上がり、青空へと変わっていた。南房バラダイスといえは、大きな鳥小屋である。私は、利用者と一緒に強気で鳥小屋に入るものの、実は大の苦手。「大丈夫、大丈夫。」などと、恐る恐る入ってきた利用者さんに声をかけるが、大丈夫なはずが無い。中には見たことの無いくらいデカイ鳥もいた。突然、鳥たちは私の強気の仮面を剥がしたかったのか、なぜか二十羽ぐらいの鳥たちが四方八方一斉に羽ばたいた。もちろん出口に一番でゴールイン。素直に金網越しに恐る恐るの観戦に切り替えた。すると、中ではみんな、頭や肩に鳥を乗せて私に手を振っている。もちろん手を振り返すが、その笑顔は引きつり、手には鳥肌が立っていた。すると、ある利用者が「須藤さんって臆病なんだね。」と……まさにチキン。

その後は、無理をせず、自分と同じように動物が苦手な人達と一緒にゆつくりと散歩することにした。そう、これが自分の役割であり、スタイルである。

利用者の須藤に対する新たな発見が「チキンボーイ」で終わるわけにはいかない。なんとか夜の宴会で汚名返上を、と気合を入れて臨んだ。豪華な料理から始まり、新人職員の余興やゲームなどで大いに盛り上がり



編集後記

夜空を見上げるとキレイにオリオン座が輝いています。

十月の制度移行から一カ月。パタパタとしていてゆつくりと空を見上げていなかった間にも、少しずつ季節は秋から冬へと移り変わりつつあります。

そんな穏やかな季節の移り変わりと同じように、新しい制度もスムーズに行かないものでしょうか……。

佑啓五十九号をお届け致します。

(飯高 晶子)

(ある里学舎小石川支援員)

た。余興では、女装してのなりきり青春アミーゴ。これが大盛況で「一生の思い出になりました。」などと、とても喜んでくれた。

二日目の鴨川シーワールドも楽しかった。無事に作業所に帰ってきた時の利用者さんのホッとした表情は早く家に帰りたいという通所施設ならではのなごさだろうか。

帰り際に、「来年は何をやってくれるの？」と、(それは気が早いだろう)……なんて思いついた。やる気満々なのは間違いない。次の行事は一歩いっ歩祭り。お互いにとつての楽しい思い出をたくさん作っていかれたらと思う。羽ばたくぞ！でもチキンは飛べないんだよね。